

中国報告



< 1 >

この秋に建国三十周年を迎え、群れていた。二度目は一九七五年一月、このときはマクラーン、ワラン、ポートルー、北京と中ソ対立下の国境を越えて単身北京へ

に到着した六月十八日は、今日つある「四人組」打倒以後の中国の現状を知るには絶好の機会であった。

それにして中国の変化は大きい。その変化は、いまや林彪

はしばしばさむのを聞いていた。もはや文化大革命そのものがたんに否定の対象であるばかりか、悪の代名詞としてさえあることが歴然とする。上海を

有の転換を意味するものであるだけに、未来への可能性とともに、そこに含まれている矛盾もまた大きい。この両義性のたまたまに、今日の中国はうごめいている。

去る六月十日から二十一日まで、私は「第二次日中友好新自由クラブの要訪中団」の講師として中国を訪問した。私にとつては、三度目の訪中である。最初

入ったが、いわゆる「四人組」の時代で「批林批孔」運動のさなかで、「造反有理」のスローガンを呼号する紅衛兵大衆が北京であったが、私たちが北京

五期生(回)が折しも開講した日であり、人民大会堂の開閉には車用車やバスがずいぶん並んでいて、この点でも、日中関係が体験した中国との大きなギャップをどうやって埋めるべきか

それには今回の新自由クラブ訪問団は、佐藤敬夫団長以下団員一同が中国の現状を自分の眼で観察し、自分自身の判断でとらえようとする意欲に充ちていて、これまでにはなかった中

変貌する中国

「四人組」の否定にとどまらず、いわゆる「プロレタリア文化大革命」そのものがトータルに否定されつつあることにおいて、自己自身の判断でとらえようとする意欲に充ちていて、これまでにはなかった中

「毛沢東思想」を建国の理念としてきたこの国にとつての未曾有の転換を意味するものであるだけに、未来への可能性とともに、そこに含まれている矛盾もまた大きい。この両義性のたまたまに、今日の中国はうごめいている。

去る六月十日から二十一日まで、私は「第二次日中友好新自由クラブの要訪中団」の講師として中国を訪問した。私にとつては、三度目の訪中である。最初

入ったが、いわゆる「四人組」の時代で「批林批孔」運動のさなかで、「造反有理」のスローガンを呼号する紅衛兵大衆が北京であったが、私たちが北京



中嶋 嶺雄 (東京外語大教授)

感慨深い三度目の中国

文草いまや悪の代名詞



嬰兒を抱き上げる人民解放軍兵士—こんな風景も見られるようになった(北京・故宮で)

団員一行を海岸通り(外港)中撮影にさえ応じてくれた。國共産党上海市委員会のビルに

案内したが、もともとここには当時の緊迫した面影はなく、門の扉も壊れぬまま、濡れている